

つつじ読書会 加賀乙彦(1929-2023)『私の芭蕉』(2020)

山口

1. 隠棲する芭蕉(1644-1694)、サリンジャー(1919-2010)、荘子(369BC~286BC)

延宝(1680年)冬、日本橋小田原町から、江東深川村の新居、いわゆる芭蕉庵へ移った。大勢の弟子を集めて俳句を教える生活から、孤独で貧乏な閑寂な世界に環境を一変させた。(p16)

前回のつつじ読書会の課題本『ナインストーリーズ』の著者、サリンジャー(1919-2010)もまた“隠棲”している。サリンジャーは、『ナインストーリーズ』の最後、「テディ」で、テディの会話に芭蕉の句を出している。

〈やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の声〉〈この道や行く人なしに秋の暮〉

また、芭蕉は荘子(369BC~286BC)の影響を受けているというのが、荘子もまた、“隠棲”の人だったという。“隠棲”というのは、そこに追い込まれるような消極的なものではなくて、〈世界〉から距離をとることで、〈世界〉が孕む問題点を浮かび上がらせる営為だといえる。(ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817-1862)『ウォールデン 森の生活』???)

〈世の人の見付けぬ花や軒の栗〉

隠棲	俗世間
<p>荘子(369BC~286BC) 現在から2300年前</p> <p>「聖人は自分が探求して知った必然的なことがらでも、それを必然にはしない。道は、自然は、天は、絶えず変化していくので必然という具合にある一方向に向かっていくのではない。<u>道は絶えず転回できる不思議な奥深さを持っている。必然だと言って頑張っていると、かならず反対の意見の者があらわれ、あげくの果てには戦争になってしまう。</u></p>	<p>衆人</p> <p>ところで聖人と逆に、衆人は、たえず必然をもとめて、それを手に入れたら多くの人々に見せてやろうとして、反対者と戦う。いちど戦いがおこると、ますます戦いに勝つという欲がでてくる。しまいには、道などどうでもよく戦いに勝てばいいと思ひ詰めて、兵をくりだしていく。<u>一度兵をくりだしたら、勝敗はつかず、戦いは長引き、兵は疲れて殺され、必然を手に入れたと、喜び語っていたものは亡んでしまうのだ。</u>(p224)」</p>
<p>芭蕉(1644-1694)</p> <p>富貴や贅沢や賑やかさを捨てて蕉風という独特の境地に達する(p16)</p>	<p>大勢の弟子を集めて俳句を教える生活</p>
<p>サリンジャー(1919-2010)</p> <p>まず子供たちを全部集めて、みんなに瞑想の仕方を教えると思う。<u>自分たちの単なる名前とかなんとか、そんなことじゃなくて、本当に自分は誰なのか、それを発見する方法を教えようとする</u>だろうな…いや、それよりも前に、親やみんなから教え込まれたことを全部、頭の中からきれいさっぱりと吐き出させるね、きっと。(p290)</p>	<p>第二次世界大戦後のアメリカ社会</p>

2. サリンジャーのおさらい

サリンジャーは、「テディ」に託して、行き詰まる近代とは別の、異なる世界の展望を語った。前回のレジュメを再掲すると、

「ドイツ人」「ユダヤ人」などという名前、小賢しい分別(※参考1)こそが、分断や排除、絶滅、つまり戦争の原因だった。近代がつくったルール(法)が、「ドイツ人のルール(法)」、「ユダヤ人のルール(法)」に過ぎず、

衝突するほかなく、いずれかを絶滅させることしかできないのであれば、そのようなルールはむしろ「吐き出さしちまう」べきだ。

このことは、芭蕉が影響を受けた、「道は絶えず転回できる不思議な奥深さを持っている」という、荘子の思想とも響き合うように思った。こうして、同じ時間、同じ場所にいない、荘子と芭蕉とサリンジャーが時を超えて交流する。繰り返すと、彼らが共有する思想は「道は絶えず転回できる不思議な奥深さを持っている」ということだ。

サリンジャーを読むことが、現在私たちがおかれている〈世界〉について考えるためのヒントを与えるように、芭蕉を読むことも、古色蒼然としたものではなく、いままさに読むべき思想がある。

今回、興味深かったのは、その芭蕉が“俳句”という文学形式を採用していることだった。俳諧・俳句という文学形式それ自体にも、行き詰まる近代とは別の、異なる世界を描く形式として、注目すべき点があるのではないか。なぜか。

3. 共感を喚起する HAIKU 『NHK 2023 年 1 月 5 日放送「戦禍の中の HAIKU」』のレポート

番組では、戦争の開始後、ウクライナ人とロシア人が詠む HAIKU を紹介している。

(1) ロシアシベリア在住のベーラさん

石川啄木が好きな父親の影響で日本の詩歌を独学で学ぶ。若い人や学生に文学を教えている。

〈特別軍事作戦 サラダに油 少なめに〉

【コメント】 もうすぐ食費を節約しなければならなくなる。前と同じには暮らしていけなくなる。あとになって火に油を注ぐというロシア語には煽るという意味があると知り、書き留めた。私は何よりも人間としてこの特別軍事作成の意味を考えます。ロシアにとって良くない出来事です。歴史的にみてロシアの進歩に何の役にも立ちません。

(2) ウクライナキーウ在住のガリーナさん

キーウ大学建築学を教え、日本に来日して戦後復興の調査をしている。また、日本の俳人野沢あき子さん(93歳)の句の翻訳をし、俳句を通じた親睦、交流がある。

〈未耕作 沃野を覆う 黒い鳥〉

【コメント】 兵員にとられ耕作する主を失った沃野。かつては実った作物をめぐりに白い鳥が耕作地に訪れていたが、いまは黒いカラスが沃野を埋めつくすばかりだ。俳句には感じ方がちがう、人と人をつなぐ力がある。

(3) ウクライナ在住のブウジスウワさん

〈公園に兵士 幾度も触れる 空の袖〉

【コメント】 まるでサリンジャーの小説に登場する傷痍軍人。戦争は身近に影を落とす。俳句は調和について詠むものです。ものともとのつながりに気付き、この世界の美しさに喜びを感じ、詠む。

(4) ロシアサンクトペテルブルク在住のレフさん

〈瓶の魚 岸辺の絶景 海を乞う〉

【コメント】 ロシアの閉塞感を瓶のなかに閉じ込められた魚に仮託する。ロシアとウクライナは大洋でともに遊泳する魚ではなかったか。ロシアでは芭蕉と一茶が一番人気がある。

つまり、HAIKU という文学形式には、日本にとどまらず、近代がつくった小賢しい線引き、日本だけのロシアだのウクライナだのを超えて、つまり転回して、共感を喚起する力がある。

4.俳句・俳諧という文学形式は「多義的な可能性へむかって姿勢をひらく」

かくのごとく必然性を転回し、共感を喚起する力をもつ、俳句、俳諧という文学形式の特徴とはなんだろうか。

以上、わたしは、芭蕉連句を詩として、あるいは文学として評価してきた。しかし、連句は複数の人間の集まりによって構成される「場」の芸術でもあった。というよりも、場の芸術という性格は、連句にとって決定的なものであった。一人でよむ独吟連句という形式もあるにはある。しかし、その場合も、自分のよんだ句を、次の瞬間、対象化し、異なった位置から次の句をつける。自己を他者に転化しながら、句を付けていくのである。むしろ、場の芸術という点では中世連歌も同じである。だが、中世連歌の場合、その「場」は、予定調和を前提としており、その意味で、はじめから一つの秩序的な場として約束され、用意されている場であった。それに比べて、乾坤の変とかかわり、多義的な可能性へ向かって姿勢をひらく蕉風連句の場は、連歌的な「場」の限界性をこえるための場であった。閉鎖的、主観的な個の場を、対話の発想によってこえるばかりでなく、階層的・職業的な場のセクト性をも、それはこえようとするものであった。したがってそれは、その場を離れても客観性をもつことができる。具体的なかたちとしては、文字にうつされた文学作品としても価値をもつということになる。

(廣末保『芭蕉』平凡社ライブラリー) 柄谷行人『日本近代文学の起源』から孫引き

つまり、俳句・俳諧には、そもそも複数の人間の対話が折り込まれていたのだった。俳句を詠むことは、対話のなかにあることだった。近代が囲い込んだ小賢しい線引きの前に、多義的な対話の場があったことを、俳句によって想起することができるのではないか。

5.加賀乙彦『私の芭蕉』で検討される“芭蕉の推敲”

私にとっては意外にも、“推敲”こそが、芭蕉の俳句を魅力的なものにしているということが、本書を読むとよくわかった。では、“推敲”することの意味とはなんだろうか。なぜ“推敲”するのだろうか。

先の結論をふまえれば、“推敲”とは“対話”のことに他ならないのではないか。

ある言葉がじっくりくるかどうかというのは、言葉を探している当人の主観的な感覚に拠っているかに見えるながら、当人が意のままに決められることではない。ぴったりの言葉は不意に、いわば「向こう」から訪れるものである。あるとき言葉がかたちを成すのは、関連する無数の言葉が生活の様々な場面で用いられ、相互浸透を生み出してきた長い歴史が背景にあるがゆえであって、その有機的連関の力学は人によるそのつどのコントロールが及ぶものではない。(古田徹也『言葉の魂の哲学』p.214 カール・クラウスの『言語論』を紹介するくだり)

すなわち、芭蕉の推敲は、芭蕉の主観的な感覚に拠ってなされている訳ではない。むしろ逆に、主観的な感覚から言葉がもともと自律的にもっている〈多義的な対話の場〉へと言葉を立ち戻らせようとする方法だといえる。その多義的な対話の場は、図地を反転しながら、本来は異なる次元にあり、決して共存できないような命題を、同じ空間上に折り重ねていく。(同様の趣意の指摘が p.55 「二重の視線」にある。「ただ見るだけでなく、そのなかに自分を見る別な眼の感覚がある」)

この【図地】の視点で、p.13の著者の解説をふまえてみると、

〈山寺や石にしみつく蟬の声〉	この句では、蟬の声は石にまつわりついている。 孤独を愛している石はうるさそうに蟬の声を聴いている。 ⇒【図】蟬と【地】蟬が固定している、まして山寺は【地】にしかならない。
----------------	---

<p>〈 淋しさの岩にしみ込むせみの声 〉</p>	<p>蟬の鳴き声を聴いていると、誰にも自己の存在を知らせない。取り残された石に余命いくばくもない蟬はせまりくる死を寂しく思いながら鳴いている。とすれば、この場合大切なのは、蟬と石とが表現し合っている寂しさだ。</p> <p>➡ [図]としての蟬と石の淋しさが前景化する。しかし、この前景化で取りこぼしている[地]が感じられる</p>
<p>〈 閑さや岩にしみ入蟬の声 〉</p>	<p>さびしいのは蟬だけではないと、芭蕉は思い返した。山寺も、蟬も石も、大きく言えば森羅万象すべてに淋しさが浸透しているのだから</p> <p>➡ここにいたって[図地]は絶えず反転し、転回するような次元にいたっていると感じる。</p>

心を動かす俳句、文学には、このような[図地]を反転さす力学がある。私たちはそれにふれて、賢しらの線引きを超える。(想い起すと、つつじ読書会で図地反転という着想をえたのは生田春月の『海図』という作品だった。またフェルメールの絵画)

【おまけ】

湖山池湖畔のさくら咲き盛り 群れ飛ぶ鴨は帰り支度か また来年も会いたいね

一見すると、くだけた結句。ここで「帰り支度」という言葉を択んでいることに魅力を感じる。「旅支度」ではなく「帰り支度」。つまり、此岸の私と同様に、彼岸で「会いたいね」と思っている誰かがいるのだ。鴨はさくらの咲き盛りを彼岸につたえる手紙のように、[図地]を反転させ、決して相まみえることのない別の空間を重ねていく。しかし「決して相まみえることのない」などという仰々しいが、それはむしろかきこいことではない。「また来年も会いたいね」と、まるでふだんのあいさつのように、軽やかに、すがすがしくいうそれは、賢しらの線引きが、じつのところ心易くのりこえられることを教えているのではないか。

【おまけ】

もしかしたら、俳句が短くなければならないのは、つまり、長いはなしというのは、冗長にも[図]を引き延ばし一人でおしゃべりしすぎ、対話の時間をそこなっているともいえる(ごめんなさい)。

坂口安吾は次のような指摘をしている。

「古池や蛙飛び込む水の音、淋しくもあるか秋の夕暮れ」

私は、右の和歌を、五十嵐力氏著『国家の胎生並びにその発達』という名著の中から抜き出して来たのであるが、五十嵐氏も述べていられる通り、ここには親切な下の句が加えられて、明らかに一つの感情と、一つの季節までが付け加えられ説明せられているにも拘わらず、この親切な下の句は、結局芭蕉の名句を殺し、愚かな無意味なものとするほかには何の役にも立っていない。言葉の秘密、言葉の純粹さ、言葉の絶対性と、如何にも虚偽威に似た言い分ではあるが、この簡単な一行と句と和歌とで、その実際を汲んでいただきたい。言葉をいくら費して満遍なく説明しても、芸術とは成り難いものである。何よりも先ず、言葉を駆使するところの、高い芸術精神を必要とする。(坂口安吾『FARCEに就て』)

(※参考1) 小賢しい線引き! 『NHK 2022年4月17日放送「日曜美術館 美は語る激動のウクライナ」』
ウクライナにあるリビウが属してきた国のエピソード。

「私はオーストリア＝ハンガリー帝国で生まれ、ポーランドで結婚し、ソ連で働き、ウクライナで余生を送っている。しかし私は一度も自分の村から出たことはない。」

偽のつながりに幻惑されず、真のつながりを見出すこと。